西村紀三郎先生を送る

経済学部長
里　中　恆　志

西村紀三郎先生は平成9年3月をもって定年を迎えられ，大学キャンパスを後にされることになった。まずは体力がよくもったというか，先生の驚異的な健康と精神力を讃えるべきだろう。本学に定年制が定着したここ20数年，経済学部の先人達は教育研究の激務のなか定年までたどり着けず，30年を超える勤続者で定年まで勤め終えた例はなかっただけに，お疲れさまと言いたい。ここに，先生のご退任を記念して，本学部に対する永年の御尽力を顧み，心からの謝意を表したい。

西村紀三郎先生は本学最長年奉職者のひとりであった。東京帝国大学卒業後，大蔵省在勤中の1954年に27歳の若さで本学に非常勤講師として迎えられ，1966年9月からは専任として本学教授に就任された。通算40年を超える真の駒澤人といえるだろう。

先生は長く大学行政の中心におられた。1960年代の末，全国に吹き荒れた大学紛争の嵐に本学も巻き込まれたとき，学内に刷新委員会をもうけ，学園民主化の論陣を張られたときの先生の活躍は今も眼に残っている。その後も経済学部長，教務部長，大学院経済学研究科委員長等，大学行政の重要ポストを歴任され，1994年8月から1996年3月までは図書館長として大学図書館行政へ手腕を発揮された。

先生は大蔵省在職中，大蔵省『昭和財政史』の編集に携わられ，歳

計篇，通貨篇，年表篇の各大著を執筆された。以来，日本財政史研究を研究活動の基本テーマとされたが，特に歴史的研究に付帯する実証研究として延べ1,100ページに及ぶ多数の「地方財政構造分析」に関する論文を本学経済学部の研究誌に発表された。これらの論文は『地方財政構造分析－西高東低型構造解明－』（白桃書房，昭和63年）にまとめられ，それによって経済学博士（駒澤大学）の学位を取得された。

西高東低型構造解明は日本列島を東西に二分したとき，地方財政支出が西日本の側に高く，東日本の側に低いことを統計資料に基づき地方財政の比較研究から指摘したものである。学位論文ではそれがどのような要因によるかが多角的に追及されたが，なお研究は継続中とのことである。こうした仕事は大変なきちょうめんさと忍耐力を要する仕事である。それはこの問題に真正面から取り組まれた西村先生の人柄をよくあらわす研究テーマだろう。

大学院教育では積極的に院生の演習指導にあたられ，多くの人材を世に送り出された。これまで本学大学院経済学研究科修士課程修了者の大部分はその修士論文を西村先生の演習指導によっている。修士論文が財政学に関するものであるときは税理士試験科目の一部が免除される特典から，院生の財政学志望者が多くなるという理由があったにせよ，修士課程，博士課程を含め先生の演習指導を受けた院生ＯＢ会（西村財政研究会）のメンバーは実に100名を越す大世帯である。大学院課程の人材育成にかけた先生のエネルギーたるや驚くべきものがある。ＯＢの諸氏はそれぞれに大学教員，公認会計士，税理士，公務員等の専門職種で立派に活躍している。

先生は日本財政学会に所属し，長年にわたり学会の理事を勤められた。本学で日本財政学会を開催するなど，本学の名誉及び学会の発展

のために活躍された。現在は推戴されて日本財政学会幹事の役を勤められている。

また，先生は学外で「竜山会」という財政学の月例研究会の精神的支柱の存在である。「竜山会」は中央大学で財政学の講義を担当された故青木得三，故山口忠夫両教授の教え子を母体に発足した会員数約50名の研究会で，原則として大学院博士課程在学以上の資格をもつ研究者の集まりである。休みなく30年以上も続いた今では世代の交代も進んだが，先生は存命する唯一人の発起人として，会の育成発展に使命をますます感じられている御様子である。

学生教育の面では，「休講しない」，「時間前に教場に入り時間通りに終わる」という先生の講義に学生は大いに悩まされたという。とくに，退任直前の1996年度は大学新カリキュラムへの移行期にあたり，学部は切り替えにともなう摩擦を余儀なくされた。例えば，夜の９時15分から10時まで週２回のペースで授業を行うという常識的でない時間割が組まれた。この授業をご担当いただけるという先生の申し出に甘えて，学部はこれを先生にもお願いした。学部運営の苦しさから，学部最高齢者の無理を承知で見てみないふりをしたことは心苦しい。こうしたことができるエネルギッシュな先生のパワーの源泉はどこから来ているのだろうか。長年の学園生活のなかで先生の健康に対する信念というか，先生の人となりらしいものに気づくこともあった。

先生の話によると，幼少の頃はあまりがっしりした体格ではなかったらしい。徴兵検査の頃までは太りたい，強くなりたいと負けん気でがんばったと語っておられた。頑強になったのは勤労動員時の特配（重労働への食糧特別配給割当）からと聞いた。本学の研究室が５階にあったときは，一秒でも早く階段を駆け上がる努力をされていて，わ

れわれはいつも煽られたものである。現在の研究室は4階だが，エレベーターを敬遠してよく階段を利用されている。先生はずっと本学空手部の部長を勤められた。空手の合宿に参加したり，空手部恒例の総持寺マラソンを走ったり，相当に気を使って，自分で自分に言い聞かせて獲得した健康だったのかもしれない。そうだとしたら，立派な信念だろう。先生は地図を頼りに方向を決めて，よく歩いたものだといわれた。タクシーを悪魔のように思われているのか，よく歩かれた。先生に同行するときはいつも徒歩を覚悟した。3時間半の河口湖一周のおつき合いをしたときは，道ばたのジュース・スタンドで，蜂蜜レモンは知らないが，牛乳なら飲むといわれた。

健康のもう一つの秘訣は先生の食べ方，飲み方かもしれない。出されたものは何でも食べる，一粒残さず食べる，好きなもの全部，嫌いなものなしというのは戦中戦後の食糧難の代名詞であるが，豊かな時代になってもこれを実践された。本学の富浦セミナーハウスの食事は量が多いとされているが，いつも残さずたいらげて，合宿は体重が増えると語っておられた。家庭では奥様が制限なさるので，そんなに食べられないとうかがった。ふだん一人でお酒をたしなむことはなさらないようであるが，ゼミ合宿の飲み会などでは，「酒が飲めるように産んでくれた親に感謝する」などといっては，いつまでも学生相手に話を続けておられた。最後の一人になるまで席を立たなかったらしい。というのはわれわれは夜中の1時か2時になると限界で，先に引き揚げるため，後は分からないからである。とにかく先生が酒席で酔ったのは，この30年間で一度しかお見受けしなかった。つまり，本来は飲めるのにいつもは節制されていたらしい。

先生の大蔵省時代の官職名は資料統計管理官と記憶しているが，本学にいらしてからも，寸分の時間を惜しんでいつでもどこでも統計処

理の仕事が進むよう，魔法の小道具のような計算尺をポケットに忍ばせておられた。電卓が売り出されてからもしばらくは愛用なさっていたようである。小さい数字の一覧表を長年見続けたためか，白内障を患われたが，術後はなにもなかったような顔をされていた。胆石を患ったときも術後さっさと病院から出てきて，取りだした大きな石を見せて回るという楽天的なところがあった。こうした楽天的な前向きの志向が健康にプラスに作用しているのかもしれない。

先生はエネルギッシュであるとともにきちょうめんであった。どんな会議でもいつもきちょうめんにメモをとっておられた。経済学部の教授会で過去の経緯が問題にされるときなど，さて西村先生のメモにはなんと書いてあるのだろうかとあてにしていた。本学の図書館長を勤められたのだから，もし「西村メモ」なる先生の手帳を図書館に残せたら，経済学部の発展の足跡をたどる貴重な資料になるのではないだろうか。原稿を書くことと数値計算作業とが先生のからだのバイオリズムに組み込まれて，健康を維持していたらしい。原稿を書くと体調がいいとか，夏の猛暑の折でも冷房はお嫌いだったようで，暑いときはどこへいっても暑いのだから原稿を書くしかないといっては，団扇でがんばっておられた。

「大学冬の時代」到来がいわれる昨今である。経済学部も国際化，情報化の流れのなかで新カリキュラムへの移行を乗り切り，先人が築き上げてきた伝統を少なくとも維持し，できれば発展させなければならないと思う。こうした時期に長年，学内外でご活躍いただいた学部の重鎮が退任されるのは残念で，寂しい思いである。ご退任にあたり，本学部への永年のご尽力と貢献に対してあらためて感謝し，ここに駒沢大学『経済学論集』の記念号を編み，そのしるしとしたい。

西村先生は，まだ，体力的には一仕事も二仕事もできそうな余力を

残してのご退任のようにお見受けする。今後，場を変えての益々のご活躍をお祈りするとともに，本学部の発展のためにも折りにふれてのご指導をお願いしたい。

（1996年10月20日）